

第 74 話<中島飛行機>の要約と参考資料

第 74 話<中島飛行機>の要約

スズは航空機の部品のメッキに不可欠な金属です。軍用機の生産で知られる中島飛行機会社は、祖母・傾山系でスズの鉱床を探し、1936年に土呂久と木浦を鉱区とする岩戸鉱山会社を設立しました。こうして土呂久は、戦争を推進する中島財閥に組み込まれていきました。

第 74 話<中島飛行機>の参考資料

74-1 鉱業権者の推移（土呂久第2陣訴訟判決書より）

採登第 65 号鉱区

大正 3 年 7 月 28 日	山田英教
大正 6 年 7 月 25 日	大谷治忠
大正 14 年 3 月 2 日	渡部録太郎
昭和 6 年 4 月 16 日	中島門吉
昭和 7 年 4 月 4 日	関口暁三郎
	中島門吉
昭和 9 年 3 月 19 日	中島門吉
昭和 11 年 9 月 14 日	中島門吉
	中島知久平
昭和 12 年 1 月 28 日	岩戸鉱山株式会社

採登第 80 号鉱区

大正 8 年	竹内令さく（貝へん乍）
昭和 8 年	竹内 勲
昭和 9 年	中島門吉
昭和 12 年 1 月 28 日	岩戸鉱山株式会社

採登 65 号鉱区、同 80 号鉱区

昭和 18 年 4 月 1 日	中島鉱山株式会社（岩戸鉱山株式会社が社名変更）
昭和 19 年 4 月 20 日	帝国鉱業開発株式会社
昭和 25 年 6 月 30 日	中島産業株式会社
昭和 26 年 8 月 29 日	中島鉱山株式会社
昭和 42 年 4 月 19 日	住友金属鉱山株式会社

74-2 桁違いの正孝

川原一之著「口伝 亜砒焼き谷」P134より

中島商事が派遣した最初の鉱山主任は、石黒というた。こん男が「かな山」の正孝さんと土地買収の話を進めての。昭和9年5月、まず4300坪の鉱山の敷地が中島の手へ渡る。あとは切り売りするごつ、正孝さんは遺産を手放した。藤次郎、利喜治、喜右衛門の3代で築いた「かな山」の財産は、すべて売り払われちしもた。一旗上げて三ヶ村へ帰るといふ藤じいさまの夢は、四代目ではかなく消えていった。

石黒や松尾と並ぶ実力者に、ごつてり太った真部義一がおった。柔道4段。渡り坑夫がからんできたときの用心棒として雇われたちゅう噂じゃった。真部が土地のことで正孝さんと交渉したときのこつ。真部は算盤をはじいて「これで売らんかね」ときいた。正孝さんな「いいでしょう」と手を打った。正孝さんが口にした金額は、実に真部の考えより一桁低かった。一桁も安う財産を売った正孝さんを、鉱夫たちは「桁違いの正孝」と呼び始むる。「桁違いの正孝」は手にした金で、定職もなくブラブラと遊び回っておった。

74-3 中島の先乗り

佐藤仲治さんの話（1978年6月17日聴取）

はじめ、松尾一男が主任兼調査。昭和8年に中島になってから、所長は石黒。石黒が来てから松尾は鉱山の調査ばかりしていた。石黒が1年か1年半どもおったかな。そのあと真部義一が主任できた。昭和10年か11年。真部になったときは、鉱山が大規模だった。真部が静岡県の丹那トンネルにおった20何人を連れてきた。削岩機、手繰り、枠入れの専門家を連れてきた。仕繰り夫（枠入れ）の佐野について、私は仕繰りの修行をした。丹那トンネルはえらい水でこなされたらしい。真部のあと篠田恭三さんが来た。東岸寺の所長で来た。会計兼責任者だった。中野内坑を開発するために、石黒主任は中野内に移転した。それで、土呂久にはいつときしかおらんかった。

*丹那トンネル（広辞苑）：東海道線、熱海・沼津間を直線で結ぶために掘られたトンネル。長さ7687メートル、大正7年起工、昭和8年貫通、同9年12月開通。

和合会議事録にでてくる鉱山主任

1933（昭和8）年11月26日議事録 石黒主任

1936（昭和11）年4月3日議事録 鉱山主任松尾一男氏

1) 松尾一男さん

佐藤常義さんの話（1979年4月20日聴取）

中島会社、東京辺の大学出が来た。軍人上りは特に多く、みな事務所に座つちよった。

中島知久平が軍人じゃから、経歴を調べずに簡単に雇いよった。

松尾に真部に中島門吉は、一つ籠の飯を食った仲。真部は体がでかくて、柔道でもしたような人。段取り付けが松尾、真部。石黒という人は、土呂久にはあまり来ず、中野内の方をやった。松尾は千島に渡って帰ってきた。ここを閉山する当時、また来ていた。

篠田さんのあとに神崎さんが来て、神崎さんは岡山の高校の先生か中学の先生かじゃった。

佐藤ハルエさんの話（1977年8月聴取）

松尾一男は（昭和4年に）百熊さんが出たあと、すぐそのあとにはいった。そのとき、鉱内の監督だった久世多四郎が、いまの鶴江さんの倉庫になっているところに住み始めた。久世は戦後、実雄さんが復員して帰ってきたあと、いちばん最後に引き揚げて長崎県へ行った。このとき、実雄さんと「中町」の静雄さんが手伝いに行った。

松尾もし、川田もし、派が違うものと思ひよった。松尾は勝次郎さんの埋まった坑内を掘っていた。松尾は「錫を掘る人げな」という話を聞いた。

佐藤勝さんの話（1971年11月聴取）

中島が盛大にやり始めた時分、中島のパイロットをしていた松尾一男という人が、熊本県玉名郡の人を20～30人連れてきた。盛大なときは200何十人おったでしょう。長屋あたりも20～30軒ありました。

福岡鉱山監督局管内鉱区一覧

昭和9年7月1日現在

試登 1803 宮崎県児湯郡木城村・東米良村 金銀銅錫砒

松尾一男 岩戸村岩戸土呂久中島商事岩戸鉱業所

採登 140 大分県大野郡小野市村 銀銅鉛亜鉛錫亜鉛重石砒 222,047 坪

松尾一男 岩戸村岩戸 3395

採登 96 宮崎県児湯郡木城村 長越鉱山 金銀銅砒 404,000 坪

松尾一男 岩戸村岩戸土呂久中島商事岩戸鉱業所

昭和10年7月1日

採登 97 宮崎県西臼杵郡岩戸村 金銀銅錫砒 135,000 坪

松尾一男 岩戸村岩戸 3395

2) 真部（まなべ）義一さん

小宮高樹さんの話（1977年3月5日聴取）

柔道の有段者で、道場を経営していた。鉱山の「渡り鉱夫」がからんできたときの用心棒として応対。徴用のがれみみたいな形で、中島門吉氏子飼いの社員として……、しだいに

技術的なことを身につけた。

佐藤正四さんの話（1978年1月28日聴取）

中島の用心棒。柔道4段。体格のいい人。ごつてり太った。百熊の住んでいた屋敷にいた。

3) 石黒さん

米田嵩さんの話（1978年6月18日聴取）

大きい男じゃなかった。真部さんより先に主任をしたかもしれん。私がサルマター一つで水引きしよったら、来てから「しっかりやりよるか」ち文句いいよったですわ。「中島が土呂久鉦山を買うたげな」ちゅう頃に。東京の方から来た男やった。

佐藤仲治さんの話（1978年6月17日聴取）

昭和8年に中島になってから、所長は石黒。5尺2寸くらいの小男。秋田鉦専卒業で34, 35歳くらい。

74-4 中島財閥

川原一之著「口伝 亜砒焼き谷」P121~122より

土呂久鉦山を買い占めた中島とは、軍用機の生産を中核にぐんぐんのしあがちきた新興財閥の中島一族のこと。その中心人物は、中島飛行機株式会社を創設した中島知久平じゃ。知久平は海軍機関学校を優秀な成績で卒業し、海軍大尉になって横須賀工廠の飛行機工場長を勤めとるときに退官、大正6年から民間初の飛行機製作にとりかかった。海軍の航海演習でヨーロッパを見て回り、近代戦の主力は航空機だと目をつけたそう。3度も留学して飛行機のつくり方を研究し、退官するとじきに会社を創る。このあたり、ずい分目先のきく要領のいい男よ。上州新田郡の生まれといえ、木枯し紋次郎と同郷になるが。そん郷里の太田に建てた飛行機工場が、軍備拡張の波に乗ってみるみる発展。村の若者20人ばかり使ちよった会社が、昭和の初めには三菱、愛知、川西などと並ぶ日本有数の航空機製造会社に成長した。

子会社に中島商事があった。社長は、知久平の次弟の喜代一。中島飛行機の材料を調達する目的で、大正11年に設立された。航空機をつくるには、アルミニウムとか錫などが必要でな。アルミは満州産、錫は東南アジア産を輸入しちよったが、果して国内で確保でけんものかと、昭和4年ごろから九州と北海道一円で地質調査を始めた。元パイロットの松尾一男が、土呂久に移り住んだ時期とびたり一致する。松尾は中島の指示を受けて、錫を探したごたる。

知久平は昭和5年に衆議院議員に当選し、政界にのり出した。翌6年12月、商工政務次官になると実業界を引退。会社を4人の弟たちにまかせ、政治の道をつき進んだ。鉦山

部門をまかされたんは、2番目の弟の門吉じゃった。中島財閥の資金を背景にした知久平は「政友会の金袋」といわれての。鉄道大臣や大政翼賛会総務を歴任して、軍国主義をおし進めちいく。

時代は激動しておった。昭和6年9月18日の夜、関東軍は奉天郊外の柳条溝で満鉄の線路を爆破し、支那軍の仕業と宣伝した。これをきっかけに満州事変が起こり、翌年3月1日満州国の建国。関東軍の仕組んだ通りに、満州は日本の植民地になってしもた。国内の不況脱出のために、支那から東南アジアへ支配圏の拡大をねらう日本に対し、権益を守ろうとする欧米列国が、日本を経済封鎖するこた予想でけたわの。国際的に孤立の道を歩む日本は、東南アジアの鉱石の輸入さえ難かしゅうなりそうじゃ。中島商事としては航空機材料の確保のために、国内の錫^や鉛^ま山の開発を急がにゃならん。

74-5 中島飛行機による錫鉛産の調査

中島鉛山株式会社「会社履歴書」

当社は、中島飛行機株式会社の創立者中島知久平氏が国内錫生産の必要を痛感し、昭和4年頃より九州一円に亘り鉛床の調査を行い、当初は姉妹会社たる中島商事株式会社により経営されていた。

74-6 中島商事から岩戸鉛山へ

小宮高樹さんの話（1977年8月15日聴取）

中島商事は昭和4年に九州と北海道一円で地質調査を始めた。操業ではない。松尾が来たとしても、はたして常駐だったか、時々顔を出して山歩きするくらいでは。

昭和6年4月16日に登録したとき、中島門吉の個人名にしたのは、中島商事鉛山部としてやっているからだろ。関口暁三郎は中島の社員。名義変更したのは社内事情だろう。

昭和5年9月、中島商事が大分県の採登98号、140号（木浦鉛山の鉛区）を買収。これは鉛種に変更して残る。

昭和11年11月、資本金1千万円で岩戸鉛山を設立。商事会社から鉛山部門を分離した。

昭和5~6年から11年の東岸寺選鉛所ができるまで、どこで選鉛したのか、木浦それとも山元？

渡部一英著「巨人・中島知久平」P267より

大正11年の3月、彼は中島商事株式会社（資本金200万円）を創立（登記面では5月14日からとなっている）して、その社長となり、喜代一を専務取締役にした。これは、注文が多くなるに従って材料入手に困難を感じなくなった中島飛行機製作所に対し

て、材料その他の需品を供給することを目的として設けたもので、その本社を東京市京橋区南大工町に置いた。

渡部一英著「巨人・中島知久平」P21より

中島一門で設けた会社は、中島商事会社、中島航空金属会社、岩戸鉦山会社、千歳鉦山会社の4株式会社と富士合名会社だけしかなかった。

中島商事は、中島飛行機会社で使用する材料や物品の購買部として設けたもので、初めは自分が社長に就任したが、後に次弟の喜代一にその椅子を譲った。(昭和12年中島飛行機と合併す)

中島航空金属は、航空発動機の原材料を鋳鍛造する工場で、社長は喜代一が兼任した。(戦後瑞穂産業と改称)

岩戸鉦山は、錫その他の金属を採掘する会社で、航空資材に関係があり、社長には二番目の実弟門吉を当てた。(戦後中島鉦山と改称)

富士合名は、同族の持株会社であって、昭和6年に創立し、中島がその社長となったが10年に解散した。

千歳鉦山(社長門吉)は、金鉦の採掘と精錬を行なっていた。これだけは中島の本来の事業と関係ない例外的なものに思われたのだが、中島から見ると、航空工業と縁はなくとも、彼の志と全く関係のないものではなかったのである。それは、金の効用から見たことであって、有事には国防上に間接に寄与する大切な事だから一というものであった。

渡部一英著「巨人・中島知久平」P312

因に、この千歳鉦山の開発は、初めは中島商事会社内に鉦山部を置き、そこで行っていたのであったが、11年10月1日別に資本金1千万円の千歳鉦山株式会社を創設して(社長中島門吉)運営された。なお、中島商事の鉦山部では、九州に在る錫鉦山も経営していたが、同じ年にこれを独立させることにし、12月23日資本金1千万円の岩戸鉦山株式会社(社長中島門吉)を創設して、鉦山部を廃止した。

この岩戸鉦山の主要鉦区は大分県南海部郡小野市村(ここに新木浦鉦業所あり)と宮崎県西臼杵郡岩戸村(土呂久鉦業所あり)に在り、両鉦山から産出される鉦物は、錫のほかには硫化鉄、砒鉦、銅鉦、鉛、亜鉛鉦等がある。中島商事がこの山を入手したのは、昭和4、5年頃であった。

74-7 中島門吉の錫鉦開発

「九州の金属鉦業」P18~

海外の錫生産は機械力の利用により漸次生産過剰となり、かつ錫代用合金の発達は、ますます錫市況に悪影響を及ぼし、わが国においても昭和3年(1928)の後半から市価は

低落して来た。

昭和 7 年 (1932) 錫の市況は回復に向い、業界は活況を呈するに至り、(略)

中島門吉氏は昭和 9 年以来宮崎県において、岩戸村地方の奥見立 (現在休山中の嘉納鉾山)、土呂久、登尾鉾山および東臼杵郡東郷町の男^{おすず}錫鉾山、鹿児島県の垂水鉾山、大分県の新木浦鉾山に対して、いずれも巨費を投じて開発し、土呂久、新木浦の両鉾山には浮選設備をもった比重選鉾場を新設し、さらに延岡市土々呂には乾湿併用の錫製錬所を建設し、土呂久、新木浦の錫精鉾を処理したが、昭和 19 年 (1944) 三井鉾山株式会社がこれを買収し、三池製錬所の分工場として山口県太田町長登鉾山のコバルトの製錬に使用した。

7 4 - 8 錫

坪谷幸六他編「資源鉾物ハンドブック」(朝倉書店、1965 年 7 月発行) P688 より

わが国のスズ鉾は、17 世紀中ごろに南九州で発見・開発されて以来、今世紀になって各地で小規模に採掘されてきたが、現在おもな産地は、兵庫県明延・生野鉾山、大分一宮崎県境付近の見立・豊栄鉾山である。明延・生野の鉾床は銅鉛亜鉛・スズタングステン鉾脈群で、前者は古生代のたい積岩・輝緑凝灰岩およびセン緑ハンレイ岩中にあり、後者は白亜紀末および第三紀のたい積岩・火山岩の中に賦存し、浅マグマ系の鉾床である。宮崎・大分県境の鉾床は古生代の石灰岩を交代したスカルン式鉾床で、鉛亜鉛鉾石を伴う。

日本鉾産誌 I P142~143 より

V 錫鉾床 (その 3)

鉾山名 土呂久 (岩戸)

位置 宮崎県西臼杵郡岩戸村土呂久 (三田井)

交通 日之影線日之影駅より岩戸まで 24km は乗合自動車、岩戸より土呂久まで 6km は車馬・自動車を通ずる。

地質および鉾床 古生代の砂岩・粘板岩・角岩および石灰岩とこれに貫入した花崗岩および蛇紋岩・石灰岩中または接触部に発達する接触交代鉾床。

鉾石 細粒、土呂久坑では錫石・黄銅鉾・硫砒鉄鉾その他の鉾化鉾物およびダンプリ石、中野内坑では蛇紋岩中の脈状をなす錫石・透輝石その他のスカルン鉾物。

品位および鉾床量 平均 Sn1%内外

現況その他 稼行中 (1954)。慶長・元禄年間より稼行、その後休山、昭和 9 年中島鉾山株式会社で操業、終戦後休山、後再開。中島鉾山 (株)